

中一 歓迎礼拝

二〇二六年四月二十四日

種を蒔く神様



東洋英和女学院 宗教部長 横浜校地担当

野田 美由紀 先生

大勢の群衆が集まり、方々の町から人々がそばに來たので、イエスはたとえを用いてお話しになった。「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。ほかの種は石地に落ち、芽は出たが、水気がないので枯れてしまった。ほかの種は茨の中に落ち、茨も一緒に伸びて、押しつぶされてしまった。また、ほかの種は良い土地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ。」イエスはこのように話して、「聞く耳のある者は聞きなさい」と大声で言われた。

(ルカによる福音書 八章四節〜八節)



2026.10.2

No. 83

〒106-8507

港区六本木五―一四―四〇
電話(三五八三)〇六九六東洋英和女学院
中学部高等部
チャペル通信

今朝は、新約聖書ルカによる福音書の言葉を読んで頂きました。先ほど読んだのは主イエスのたとえ話の一つで、「種を蒔く人」のたとえという小見出しがあります。

上級生の方は、福音書に書かれた主イエスのたとえ話を読んだことがあると思います。たとえ話とはどんなものでしょうか。

私たちは、当たり前ですが、誰もが共通の知識や経験をもっている訳ではありません。例えば、クラス担任の先生のことを、ほかの学校に行っている友だちに説明するとしたらどうでしょう。いくつかの特徴を挙げることもあると思いますが、なかなか自分の思っている先生のイメージが伝わらないかもしれません。そんな時、自分と友だちが共通して知っている誰かに似ている、と言うと、なんとなく伝わるのではないのでしょうか。

そんなふうに私たちも普段何気なくたとえを使っています。たと

えが上手だと、知らない人や物事について、聞いた人が（正確に理解はできなくても）イメージを描きやすいからです。

主イエスは、たとえ話の名人だと言われます。主イエスのお話を聞きに大勢の群衆が集まっていたが、その時代の一般の人々は、学問がある人、皆さんのように学校でしっかり勉強してきた（今は勉強している途中ですが）人は少なかったと思います。硬い言葉や抽象的な表現で難しいお話をされても、ピンとこなかったでしょう。でも、主イエスのお話は人々を惹きつけました。それは自分たちの身近な題材、農業とか羊飼いと家族関係とか、そういう題材を使ってお話しされたので、生き生きとイメージを思い浮かべることができたからです。

主イエスのお話を聞いて、なんとなくその場面を目に浮かべることができたでしょう。ちなみにここに出てくる種は、たぶん誰もが知る麦ではないかと思えます。

種を蒔く人が種蒔きをする様子、主イエスは細かくお話しされました。皆さんは聞きながら、その様子が目に浮かびましたか。種を蒔いている間に、ある種は道端に落ち、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。ほかの種は石地に落ち、芽は出たが、水気がないので枯れてしまった、ほかの種は茨の中に落ち、茨も一緒に伸びて、押しつぶされてしまった……ここまで聞いて、あれ？と思いませんでしたか。これは現代の農家の方にとっての「あるある」ではないと思います。せっかく蒔いた種が、道端に落ちたり石地に落ちたり茨だらけの場所に落ちたりしてしまつて人に踏まれ、鳥に食べられてしまふ、または芽を出しても枯れてしまつたり、伸びてきたのに茨にふさがれてしまつたり、どれも実るところまでいかないので。随分コスバが悪いと思いませんか？

でも、これは新約聖書の時代のその地域では「あるある」だったようです。当時の農夫は種を手で蒔いていましたが、かなりおおざっぱなやり方で、まるで節分の豆撒きのような感じで、耕していない地面に蒔いたそうです。ざつと種を蒔いた後で土を耕して、ようやくそこが畑らしくなるのです。もちろん、もともと麦が育ちやすい柔らかい土の場所もあったでしょう。でも、雑に蒔かれた種のうち結構な数が、人が歩く道端や石だらけで芽が出て根を下ろせない土地、麦の成長を妨げる茨が茂っている土地にも落ちていったのです。

昔の人は結構おらかというか、ユルイ種蒔きの仕方をしていたものです。私たちは、なんて無駄の多いやり方だ、と思います。が、主イエスの話を聞いていた人たちは、そうそう、そんな感じだ

よな、とうなずいていたかもしれない。さっきは無駄になる種のことを言いましたが、もちろん良い土地に落ちた種は芽生え育って何倍もの実を結びます。「百倍の実」はだいたいオーバーですが、多くの種が実を結ばない中、良い土地に落ち、すくすくと育つて実を結ぶ種は、それほど素晴らしく思えたのかもしれない。

もちろん現代の農家の方は機械化された農業でずっと効率のよいやり方をしているでしょうし、昔でももう少し無駄のないやり方ができなかったのか、と思いますが、そもそもこれはたとえ話であつて、主イエスはコスバの良（悪い）種蒔きについて、農業指導の話をなさつた訳ではありません。

このたとえ話には、解説がついています。「種を蒔く人」の説明という小見出しがある所です。それによると、種は神様の言葉です。道端のもの、石地のもの、茨の中に落ちたものについてそれぞ

れ説明がなされていて、それぞれこういう人たちである、と言われています。御言葉を聞いても悪魔によって心から御言葉が奪い去られてしまう人たち、聞くとその時は喜んで受け入れるものの、試練に遭うとすぐに身を引いてしまう人たち、御言葉を聞いても人生の思い煩いや富や快楽に覆いふさがれて、実が熟することのない人たち、つまりはみんな御言葉を聞いても実を結ばない人たちだと言われています。そして良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちだと言われます。種が落ちたそれぞれの土地は、御言葉を聞く人、というか聞く人の心だと考えてよいと思います。

私はどのタイプかな、あの人はどれだろう、と考える人がいるかもしれません。礼拝や聖書の授業で神様の言葉を聞いても（悪魔が奪い去ったかどうかはともかく）まるで何も聞いていなかったように忘れてしまう道端のような心、

またはちょっといいな、と思っても、自分に変なことがあると神様の言葉なんて忘れてしまう石地のような心、それから、主イエスの教えを實行してみようと思っても、自分の悩みやもっと楽しいことがあると、それに気を取られて実を結ぶまでいかない茨の地的な心、どれも私たちにとって「あるある」ではないでしょうか。

私は最後のタイプ、善い心で御言葉を聞いて守り、たくさんの実を結ぶ人だ、という自信のある人がいたら素晴らしいですが、このたとえば、人間を血液型のように四つに分類する話ではないと思います。私たちの心はどれか一つではなく、誰の心も道端のようになったり石地のようにであったり茨だらけの土地になったりすることがあり、良い土地の心になることでもあると思うのです。本当の土地ならば、種が落ちても鳥に食べられたらそれきり、根がなくて枯れてしまったらそれまで、茨にふさがれて実らなかったらそこまでだ

と思います。でも、私たちの心は良くも悪くも変わりやすく、その時々いろいろな土地になるのではないのでしょうか。

主イエスはたとえの後に「聞く耳のある者は聞きなさい」と言われました。私たちの耳は絶えずいろいろな音や言葉を聞いていますが、でも本当に「聞く耳」をもって聞くべきことを聞いているかという、そうでもないことがあります。

このたとえば、もちろん神様の言葉を聞くことについて語っています。でも、主イエスは、同じ神の言葉を聞いていても聞けない人がいる、聞いても実を結ばない人もいる、だから立派な善い心で聞いてそれを守りなさい、良い土地の心をもつように努力しなさい、と私たちに命じておられる訳ではないと思います。このたとえばは登場人物が一人きり、「種を蒔く人」だけです。この人は誰でもいいか。神の言葉を蒔くのですから、神様と考えてよいと思い

ます。

私たちの心はその時々で、道端や石ころだらけの土地、茨の生い茂る土地になることもあるし、時には良い土地のように御言葉を吸収してそれが育っていくこともあります。でも種を蒔く方である神様は、良い土地だけを選んで御言葉の種を蒔く訳ではありません。土地と違って人間の心は、道端だったのに良い土地に変わることもある、石ころだらけ、茨の生える土地だったのに、落ちた種がいつの間にか根を張り、育って実を結ぶこともある、そのような希望と期待をもって、無駄とかコスパが悪いとかは気にせず、種を蒔き続けるのが神様なのです。

時には反対に、良い土地だったのに、石地になったり茨が生え出したりすることもあります。それでも神様は、そこに種を蒔き続けて、再び良い土地になり、実を結ぶように働きかけてくださるのです。

神様は、私たちがどんな土地

である時も御言葉の種を蒔き続けてくださり、その種が芽を出し、育って実を結ぶように願っておられます。その「実」とは、この世で成功し、有名になる、多くの富を得る、といったことではない、それがゴールではないと思います。神様が望まれる豊かな実とは、神様の恵みを感謝して、自分の与えられた賜物、それぞれの力を用い、人に分け与える、まさに東洋英和の大事にしている「敬神奉仕」という生き方ではないかと思っています。

神様は私たちの心が良い土地であっても道端や石地や茨の地のようでも、変わらず御言葉の種を蒔き続けてくださいます。そして、それが芽を出し、育って実を結ぶことを、急がず諦めずに待っておられます。

入学したばかりの中学一年生は、これから東洋英和の中高でいろいろなことを学び、経験していくと思います。もちろん上級生の人たちも、まだまだ長い英和での

生活を過ごしていきます。多くのことを学び、考え、友だちと学校生活の経験を共にする中で、嬉しいこと楽しいことも、たいへんなことや思うようにいかないこともきつとあるでしょう。でも、英和だからこそ得られる貴重な経験がたくさんあると思いますし、それらを通して皆さんが成長していけることを信じています。

その中で、毎日の礼拝をはじめ、神様の御言葉を聴くことも、ぜひ大切にしてほしいと思います。それは、皆さんをこの学校に招かれた神様ご自身の願いでもあります。そのような神様の願いによって建てられた東洋英和女学院という学校で学んでいることを、どうぞ心に留めて頂きたいと思います。

花の日礼拝

二〇二六年六月九日

自分の素敵な花を咲かせましょう
—タラントンを活かす—



横浜訓盲学院 理事長
笹野 信 治

天の国はまた次のようにたとえられる。ある人が旅行に出かけるとき、僕たちを呼んで、自分の財産を預けた。それぞれの力に応じて、一人には五タラントン、一人には二タラントン、もう一人には一タラントンを預けて旅に出かけた。早速、五タラントン預かった者は出て行き、それで商売をして、ほかに五タラントンをもうけ。同じように、二タラントン預かった者も、ほかに二タラントンをもうけた。しかし、一タラントン預かった者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠しておいた。さて、かなり日がたってから、僕たちの主人が帰って来て、彼らと清算を始めた。まず、五タラントン預かった者が進み出て、ほかの五タラントンを差し出して言った。『御主人様、五タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに五タラントンもうけました。』主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しの

ものに忠実であつたから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』次に、一タラントン預かつた者も進み出て言った。『御主人様、二タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに二タラントンもうけました。』主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であつたから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』ところで、一タラントン預かつた者も進み出て言った。『御主人様、あなたは時かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていましたので、恐ろしくなり、出かけていって、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です。』主人は答えた。『怠け者の悪い僕だ。わたしが時かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることを知っていたのか。それなら、わたしの金を銀行に入れておくべきであつた。そうしておけば、帰つて来たとき、利息付きで返してもらえたのに。さあ、そのタラントンをこの男から取り上げて、十タラントン持っている者に与えよ。だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。この役に立たない僕を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。』

(マタイによる福音書 第二十五章一四節―三〇節)

東洋英和女学院も大変歴史のある学校ですが、横浜訓盲学院は、東洋英和女学院の創立の五年後の一八八九年(明治二二年)に創立され、今年の九月には、一三七周

年を迎えます。横浜訓盲学院は、視覚に障がいのある人の学校、つまり盲学校として今日まで歩み続けています。

本学院は、はじめは、生活に困

窮している視覚に障がいのある人の生活と学習の場を提供しようとして作られた学校で授業料もとらなかったようです。そのような学校でしたので、学校経営が、厳しい時期もありました。公立化の話もありましたが、キリスト教の愛の精神に基づいて行ってきた教育ができなくなるという思いから、私立の盲学校として歩む決意をして今日に至っています。今、県立や国立大学附属など日本全国で六七校の盲学校がありますが、そのうち、私立の盲学校は、横浜訓盲学院一校だけになってしまいました。そして、もう一つの本校の特徴は、視覚障がいの他、他の障がいを併せ有している人、例えば、目が見えないだけでなく、その他に耳が聞こえない、知的障がいがあるなど、重複障がいの子ども達に特化した盲学校だということです。そのことと、今日の聖書の箇所は、関係がありますので、早速、聖書の御言葉を聞いていきましょう。

今日の聖書の箇所は、イエスさまがお語りになったたとえ話の一つです。イエスさまは、タラントンのたとえ話をされました。

ある人が、かなりの長い期間、旅に出たというのです。そして、その主人は、留守の間、自分の仕事をしっかりやりなさいという思いで、自分の全財産を自分の三人の僕、つまり使用人たちにそれぞれ、五タラントン、二タラントン、そして、一タラントンを預けました。そのように一人ひとりの僕たちに与えられた財産のことをここでは、タラントンというお金の単位で呼んでいます。一タラントンと言うのは、六〇〇〇日、つまり、二〇年分の賃金であり、今のお金にすると、数千万円から、一億円以上ということになるでしょう。その意味では、五タラントンも二タラントンも一タラントンもそれぞれ、相当な金額になります。この僕たちにとっては、それまで見たことも考えてみたこともないようなお金をばんと預けたと

いうのです。

ここで、イエスさまは、たとえ話をされているのですが、「主人」とか、「僕」とは、いったい誰のことを指しているのでしょうか。この僕たちというのは、イエスさまの弟子たちのことであり、そして、私たち一人ひとりのことを言っているのです。

この僕たちには、主人がいいます。この「主人」とは、神さま、あるいは、神さまの御子であるイエスさまのことを指しています。この主人であるイエスさまは、今、旅行に出かけていて不在でしたが、かなり時がたってから、主人が帰って来ました。

神さまは、私たち一人ひとりに、タラントンを活用するようにと預けられました。そうであるならば、このタラントンは一体何なのかと言うことを、ここで改めて考えてみる必要があります。このタラントンというのは、先ほど申しましたようにもとお金の単位です。それが英語のタレン

トという言葉になり、才能という言葉になり、才能のある人、テレビに出てくる芸能人のことをタレントさんと今は呼んでいますね。ですから、タラントンは、一人ひとりに与えられた、才能や賜物ということになります。

けれども、本当に特別な人だけに、タラントンが与えられているのではありません。神さまは、全ての人に例外なく才能という個性を与え、人格を与え、それを生かすことが出来るようにしてくださっているといえます。

横浜訓盲学院の高等部専攻科で「成人を祝う会」を開きました。

成人式を迎えた生徒の一人は、産まれたときに、視覚障がいや肢体不自由、知的障がいなど、たくさんさんの障がいを併せ有していることがわかりました。医者から、大人まで丈夫に元気に育つかどうか分かりませんと告げられ、この生徒のご両親は、途方に暮れたそうです。でも、その子なりに自分の持てる力を活かして、与えられた

タラントン、つまり、賜物を精一杯活用してきました。他の人と比べれば、タラントンは少なかつたかもしれませんが、不平も言わず、他人を羨むことなく自分に与えられたタラントンを精一杯活用してきました。でも、その生徒だけの努力だけではなくそこには医師、リハビリの先生、学校の先生、そして、家族など周りの人々が、本人に寄り添い、愛情を持って接してきたからでもあります。

学校の「成人を祝う会」で、その生徒は、「お父さん、お母さん、私を今まで育ててくれてありがとうございます。そして、先生から勉強をたくさん教えてもらったので、いろいろなことができるようになりました。ありがとうございます。と立派に自分で考えてみんなの前で、お話をすることができました。そして、自分の将来の夢についても話してくれました。それを聞いたお母さんは、「この子が産まれたときは、本当にどう育ててよいか分からなくて、不

安でいっぱいだったけれども、こんなに立派な大人になりました。産まれてきてくれて本当にありがとう。そして、優しく愛情を持って、指導してくださった先生方に感謝の気持ちで一杯です。」と目に涙をためて話してくれました。

この子にとっては、他の人と比べれば、視覚障がい、肢体不自由、知的障がいを併せ持っているということ、様々なハンディがあります。しかし、自分に与えられた能力、個性、今日の聖書の言い方をすれば、神さまから預かったタラントンを一生懸命活用している。神さまも、この生徒に対して『忠実な良い僕だ。よくやった。主人の喜びとともに喜んでくれ。』と言ってくださっているに違いない、そして、神さまから預かっているタラントンを活用するとはこういうことだと本当に思わされました。この生徒だけではなくて、今までこの生徒に関わってきた医師、教師、家族など多くの人々も、それぞれのタラントンを

活用してきたということになると
思います。

そのようにわたしたちには、それぞれ異なるタラントンが授けられています。それを一人ひとりの個性と呼んでもよいのではないかと思います。一人ひとりの異なるタラントンを神さまから預かっている私たちの存在そのものが、生まれた時から、天国に召されるときまで、神さまからお預かりしているものであるということになります。

どんなに小さく見えるものであっても、自分なんか生きていたってしょうがないなどというようなことはないのです。

わたしたちの学校の教職員は、たくさんハンディキャップを持っている幼児児童生徒が、神さまから預かっているタラントンを十分に活用できるようにすること、それが、神さまの愛に基づく教育ということにつながると考えています。そして、神さまから、『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であった

から、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』と神さまから喜ばれるようにしたいのです。

私たちも、一人ひとり神さまが与えられた、タラントンは、違いますが、それぞれに与えられた、タラントンを十分に活用することが、神さまが善しとされ喜んでくださるのです。

今日のこの奨励の題を、「自分の素敵な花を咲かせましょう——タラントンを活かす——」といたしました。オーケストラの演奏では、バイオリン、フルート、トランペット、小太鼓、大太鼓など色々な楽器によって、演奏します。それぞれの音が、響き合って、素晴らしいハーモニーが生まれます。神さまによって、一人ひとりの心に植えられている、タラントンのいう種、言い換えますと、「一人ひとりに与えられた賜物」を、不平不満を言うのではなく、感謝して、精一杯活用し、人のために奉仕していきたいと思います。

YWCA礼拝

二〇二六年四月十七日（中一歓迎会）

高二

（YWCA会長）

わたしの目にあなたは価値高く、貴く、わたしはあなたを愛し あなたの身代わりとして人を与え国々をあなたの魂の代わりとする

（イザヤ書 四三章四節）

みなさんは、周りと比べて自分の良いところはどのようなところか考えたことはありますか？ 私は中一の時、「自分は、周りのみんなと比べてどうなのだろう」と、少し不安に思った事を覚えています。入学した時、周りのお友達や先輩がものすごい輝いて見えて、それと比べて私は価値がない存在なのだと思ってしまったので

す。この考え方がいつから変わったのか正直細かいことは覚えていません。でも、ただ一つ確かなのは周りのお友達や先生が私のありのままを受け止めて認めてくれたことです。周りの人が私の良いところをいつも見てくれていて、良いところを教えてくださいました。また、いつも私の意見をたとえそれが本当にくだらない、どうでも良いことでも一生懸命聞いてくれて寄り添ってくれました。これは当時の私にとってとても大きなことだったのだと思います。いくら自分に自信がなくても、ものすごい勉強ができるわけでもない私を数字や相对評価を通してではなく大切な存在として見てくれる。そんなお友達が周りにたくさんいることは当時の私にとっていまの私

にとっても心の支えになっています。

今日お読みした聖書箇所で、神様は私たちひとりひとは価値がある素晴らしい存在なのだ教えてくださっています。神様はどんな私たちでも私たちを愛し、価値ある存在としてくださるのです。今年のYWCAの活動目標の一つに「尊厳について知り、考える」というものがあります。尊厳とは「その人がその人であるだけで素晴らしい」という、みんなが生まれるがために持っているものです。お互いの尊厳を大切に合うことで、誰もが安心して過ごせる、自分の居場所があると感じられる活動になっていくことを願っています。

最後に皆さん入学・進級おめでとうございます。今年もみなさんにとって良い一年になるようにお祈りいたしましょう。

● 中一 歓迎礼拝新生生の言葉

中一

今日は私達中学一年生のために、このような心のこもった歓迎礼拝をしてくださり心の底から感謝します。

四月七日、私達は東洋英和の入学式を迎えました。入学式の朝、ずっと憧れていた東洋英和の入学式に私が出席できるということが信じられず、制服を着てもまだ半信半疑でした。そして両親と共に東洋英和の門に着た時、初めて自分が英和生になった事を実感しました。言葉に表せないほど嬉しい気持ちでした。教室に入ると、クラスのみんなが私を温かく迎えてくれました。そしてみんなで自己紹介をしていくうちにだんだん打ち解けていき、これからこのみんなと六年間を過ごしていくことを考えると、とても楽しみになりました。

いよいよ入学式です。大講堂に入った時、私は感動し涙がこみあげそうでした。とても厳かな雰囲気心地よかったです。先輩方のハンドベルの演奏に私は心をひかれました。石澤先生や高橋先生がおっしゃっていた、敬神奉仕を理解し、実施できる人になろうと心に誓いました。

翌日から、憧れの英和生としての生活がスタートしました。礼拝や授業などすべてが新鮮に感じました。クラスの友達に分からないことなどを聞くと、優しく丁寧に教えてくれました。その姿は同級生とは思えないほどかっこよく見えました。私はこのような友達を見習ってこうと強く決心しました。このように私はとても優しい友達ができ、充実した日々を過ごしています。

私が東洋英和の六年間の生活で見つけた力は二つあります。一つ目は英語力を身につけ、自分の視野を広げることです。英語は世界共通言語と呼ばれているため、

英語が話せれば世界のいろんな人と交流ができると考えるからです。二つ目は敬神奉仕を理解し、実践できる人になることです。私は自己中心的な行動をとってしまいうことがあるため、そのような自分を変えていきたいと強く思っています。

自分で選択して今ここに居るのではなく、神様が私達を選んでくださった、ということ常心に心に留めて生活していきたいです。また世界には戦争などで私たちのような生活を送ることができない人々が少なくはありません。今の生活を当たり前と思わず、そのような人々のことを考え、よりそっていきたいと思います。英和生としての自覚を持ち、誇りを持って生活していきます。先輩の皆様、先生方、私たち中学一年生をこれからどうぞよろしく願っています。

●花の日報告

中一

皆さんは花の日訪問以外で老人ホームへ行かれたことはありませんか。

私は幼い頃に、曾祖母が利用していた老人ホームへ何度か行ったことがあるのを覚えています。

曾祖母が利用していた老人ホームでは、他に利用している方々もとても親切で、幼い私にたくさん話しかけてくれたり様々なことを教えて下さいました。皆様とても生き生きとされていて、こんな方々になれたら良いなと幼い私ながらに考えていました。

だからこそ、今回の花の日訪問で、老人ホームへ行かせていただけると聞いたときは、少しなつかしさを感じました。老人ホームでは何をするのか、どこに行くのか、とても楽しみでした。

私は南麻布高齢者在宅サービス

センターという施設に行くことになりました。

花の日訪問までに認知症の方々や高齢者の方々との接し方など様々なことを学ばせていただきました。学ばせていただいたことに感謝をし、しっかりと活かして高齢者の方々と接していこうと決心しました。

また、訪問をしてあげるといふ姿勢ではなく、同じ立場であるということも改めてよく理解をして訪問に向けて準備をしました。

いよいよ、花の日訪問当日です。私が選んだ花はひまわりです。私はひまわりを見るとなぜか口角が上がりにつこります。花束を渡すときに少しでも笑顔になってほしいという思いからひまわりを選びました。

花の日礼拝で花をささげて、その花を持って、老人ホームへ向かいました。

向かう途中は緊張して、何を話そうか、などと考えていましたが、音楽の先生が話して下さいった

「笑顔で楽しくお話してきて下さい。」

という言葉を思い出して少し緊張がゆるみました。

老人ホームではまず最初に、「ふるさと」と「いつくしみぶかき」を歌いました。途中から、一緒に歌って下さるおじい様おばあ様方もいらっしゃって、とても嬉しくなりました。

花束を渡す時間となり、渡すと、大変喜んで下さいました。喜んで下さったことが本当に嬉しかったです。私と話をして下さいた方は人として生きることの大切さや、努力をすることの重要さについてお話して下さいました。お話は大変興味深く、私にたくさん学びを与えて下さいました。

そのあとに行ったじゃんけん大会では、大いに盛り上がりました。おばあ様おじい様皆様にとても楽しんでいただけ嬉しかったです。

短い時間でしたが、とても心に残る有意義な時間を過ごすことが

でき、この時間が終わってしまふのがさみしかったです。本当に良い経験となりました。

今回の花の日訪問で学んだことは大きく分けて二つあります。

一つ目は、隣人を愛することです。当たり前のことなのですが、本当に隣人を大切にすることとは、お互いに協調し合い、お互いのことを尊重し合うことなのではないかと感じました。

私はおじい様おばあ様にたくさん素敵な笑顔をもらいました。でも、私がおじい様おばあ様に出来たのはほんのささいなことですが、けれども、そんな小さな力でも笑顔を見せて下さる方々はたくさんいらっしやいます。

今、世界では戦争や貧困などで苦しんでいる方々が大勢いらっしやいます。皆が隣人を愛すること、それが一人でも多くの人が笑顔になれる方法だと思いました。

私は花の日訪問を通して改めて「隣人を愛することの大切さ」を学びました。

まずは私が「隣人を愛すること」を实せんしていきたいです。

二つ目は感謝を忘れないことです。今回の花の日訪問という素晴らしい経験をさせていただいたのは先生方を含むたくさんの方々のおかげです。また、この花の日訪問はもちろん、出会いや様々な教えによって、自分を成長に導いて下さる環境や人々、全てのことへ感謝をして、一日一日を大切に過ごしていきたいです。

最後になりますが、花の日訪問を支え、準備実行をして下さった、神さま、先生方をはじめとする関わった全ての方々に感謝をして二〇二六年度花の日訪問の礼拝報告とさせていただきます。

中一

六月九日、私たち中学一年生はこの日に花の日訪問を行いました。この日は一人ひとりが心をこめて準備した花束が大講堂に飾ら

れてとてもあたたかい雰囲気の中で礼拝が行われました。

礼拝では、横浜訓盲学院理事長の笹野信治先生のお話をうかがいました。横浜訓盲学院では視覚や様々なところに障がいのある方を教育されています。障がいがあるからといって、その方々を差別したりせず、どんな人にも神さまからいただいた賜物があることを心にとめ、その賜物を探して自分なりに活かしていくことが大切だと笹野先生はおっしゃっていました。

この礼拝のお話を通して、全ての人が神さまから賜物をいただいている、その賜物を探し周りの人のために活かすことが大切だと改めて感じました。

私は訪問に行く前、高齢者のおじい様やおばあ様と何話をしようか、楽しんでいただくことができるだろうかなどと不安な気持ちがとても大きかったです。しかし、訪問を終えた今、様々な人に寄りそい、思いやりの心を持って接す

る良い機会となったと感じ、この機会をくださった全ての方、そして良い学びへと導いてくださった神様に心から感謝いたします。

私はこの花の日訪問を通して三つのことを感じました。

一つ目は、それぞれの人の個性を受け入れ寄りそうことの大切さです。私がお花をお渡ししたおばあ様は、泣きながら「ありがとう」と言っても喜んでくださり、言葉を発するのが難しい様子でした。私はそのおばあ様に何と話しかければいいかわからず、とてもとまどいました。そんなとき、私は相手に寄りそうことの大切さをとても実感しました。そして、たとえ話せなくても「相手と一緒にいて、寄りそうことで、自分の内にある思いやりの心や優しさが伝わっていく」のではないかと思いました。

二つ目は、人に寄りそうということは自分の賜物を活かすことにつながるといことです。みなさんは、自分の賜物は何だと思いま

すか。私は、神さまから人間がいただいた賜物の一つに、人それぞれの個人の「気持ち」というのがあると思います。人にはそれぞれ、その時々のお気持ちが、その時、その場面での気持ちが全員全く一緒ということはないと思います。人に寄りそうとき、私たちは相手の気持ちを考えるとともに、自分の思いやりの優しい気持ちを使います。花の日訪問で訪問施設の方々のたくさん笑顔を見ることができ、寄りそうことは相手の気持ちも自分の気持ちもあたたくすることができると実感しました。このように、寄りそうことは自分の賜物を相手のために活かし、周りを明るく笑顔にすることにつながると思います。

三つ目は、常に感謝の心を持つことの大切さです。どのような時も、自分は家族や身の回りの方々、そして神様に支えられているということを心にとめ、たくさん感謝を周りの人に伝え続けていきたいです。

私はこの花の日訪問を通して、敬神奉仕の「奉仕」の第一歩を学ぶことができました。そして、その奉仕とは、相手に寄りそい、自分の賜物を周りの人のために輝かすことだと知りました。

これからの学校生活、そして、社会に出てたくさんの方々と関わっていく中で、この奉仕の姿勢を忘れず、思いやりの心を持って過ごしていきたいです。また、たくさんさんの優しさと感謝で周りの人を笑顔にしていきたいです。

● クラス礼拝

高三――

皆さんは、小学生の頃特に好きだった本がありますか？ おそらく一冊は、好きで何度も読み返した本があるのではないのでしょうか。では、それを高校生になってから読み返したことはありますか？

私は今年の春休みに、小学生の頃から大好きだったハリー・ポッターシリーズを一巻からすべて読み返しました。イギリスを舞台にした、主人公ハリー・ポッターが魔法学校ホグワーツで過ごす7年間を書いたファンタジーです。小学生の時と変わらず、独特な世界観と個性的な登場人物が魅力的な作品でした。しかし、その時では理解できなかった事柄に多く気が付かされました。

特に印象的だったのは、「きちんと整理された心を持つ者にとっ

ては、死は次の大いなる冒険に過ぎない。」というセリフです。これはシリーズを通して伝えられているテーマで、作中では主人公を含む多くの人が、勇気ある行動として自らの死を受けいれていて、死を避けるべき恐れることとして描写してはいませんでした。

私達人間はどうしても死を恐れてしまいます。イエス様でさえ、十字架の上で「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」つまり「我が神、我が神、なぜ私をお見捨てになったのか」と言いました。しかし、今日の聖書箇所で、イエス様はこうもおっしゃっています。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」つまり、死は神様を信じる者にとっては、神の国へのステップに過ぎないのです。私達は死を恐れる必要はありません。神様を信じて、死のその先を見ることができるようになります。

私は死を恐れ、間違った選択をしてしまいがちですが、今後はこ

の言葉を信じて、これからいつ来るかわからない死を恐れずに受け入れられるように、常に心を整理して生きていけるよう努力したいと思います。

高三――

最近技術の進歩に関するニュースが溢れています。Amazonが量子コンピュータの実用化を目指す他、トランプ大統領が中国との競争を意識した大統領令に署名するなど世界中で激しい開発競争が起きています。振り返ると、ちょっと前までAIは日常にありませんでした。技術はたった数年で私たちの日常を変えており、これからの社会も想像できないほど変わっていくのだと思います。また身近なことでは、高校三年生になり、進路について考えることが増えました。特に六月に入ってから受験が現実味を帯びてきて、周りの姿に焦ったり、成績を見て

落ち込むこともあるかもしれませんが。どうしても私たちは、目に見える結果ばかりを気にしてしまします。そんな中で、今日の聖書箇所が印象的でした。「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」

受験を前に不安を感じることがありますが「悩む」ということは、それだけ将来に真剣に向き合っていて、ちゃんと努力している証拠なのだと思います。自分の中に少しでも頑張っている気持ちが無ければ、悩むこともないからです。国や企業がどれだけ技術を競い合い社会が変わったとしても、人を励ます言葉や誰かを思いやる気持ち、自分の当たり前に感謝する心などといった、目に見えない大切なものの価値は決して無くなりません。不安を感じる今だからこそ、そういった心の大切さに気がかされるのではないのでしょうか。目に見える社会の変化は著しいで

す。だからこそ変えられないものの価値が際立つのだと思います。未来に何が待っているのかは誰にも分かりません。これから先、何か予期せぬことが訪れるかもしれませんが。社会は大きく変化していくでしょう。しかし、そのような変化の中でも、何を大切にするべきかを考え、賢く判断する力をもつとともに、見えるものだけにとらわれるのではなく、いつまでも続く、見ることでできない大切なものに目を向けたいです。そして、悩んだ時はそれを成長の糧だと思って毎日を大切に過ごしていきたいです。

●ディアコニア活動記録

中一

●アイマスク・もみじ体験

- どんなことをしましたか？
- ・軍手をつけておりがみを折る。聖書をめくる。
- ・サポーターをつけてうでや足が曲がるかを体感する。
- ・ゴーグルをつけて目の不自由さを体感する。
- ・ヘッドフォンをつけて耳の不自由さを体感する。
- ・アイマスクをつけて目が見えない状態で歩いてみる。
- この日の活動を通して発見したこと、興味を持ったことは何ですか？
- ・折り紙や聖書でふだんは簡単にめくれるページや折れる紙が、めくれなかったり、やぶれてしまったたりして、手の不自由さは生活に深く影響すると思った。
- ・アイマスクをつけると目が見え

ない世界になり、案内している人につかまって歩かないと進めないためこわく感じた。案内するすときには、詳しい情報があると見えない人でも安心するることができると思う。

○この日の感想を書きましょう。
ディアコニア活動で、体の不自由な方たちの思いや体感を学ぶことができた。特にアイマスクをつけて目の不自由な人と同じようにしたときは、目の前が暗くて何も見えないので、不安があったし、軍手をつけたときには自分が思っているように手が動かなくてイライラする気持ちもあった。このように体が不自由な人の気持ちを考えることができた。この学びをもとに街中で困っているような人を見かけたら積極的に声をかけて助けるようにしたい。

中一

●アイマスク・もみじ体験

○どんなこと：

目の不自由…アイマスクをつけて
色々な障害物をお互いの指示で
よけあった。

色覚の不自由…ゴーグルをつけて
チョークの色を確かめた。

聴覚の不自由…聴覚をさえぎる
ヘッドホンをつけてお互いの小
さな声で話し合った。

手首の不自由…手首におもりをつ
けて、文字を書いた。

足の不自由…足の関節にシートを
つけた。

手の不自由…手に軍手をつけて、
折り紙をしたり、聖書のページ
を探した。

○この日の活動：

年をとっていくにつれて、いま
で簡単にできていたことが難しく
感じてしまうことが分かった。私
が特に興味を持ったのは目の不自
由で、ふだん気にもかけなかった

廊下が目に視えてなかっただけで、あんなにこわくなるとは思わなかった。今回体験したのは生きる上で大切な機能でそれがなくなったときの大変さが分かった。

○感想：

もみじ体験を通して色々な不自由のことを今までよりくわしく知ることができた。今の私たちには完全に分かることはできないけど、いつかは経験しかねないこともあるので、その大変さを少しずつでもこれからも知っていきたいと思った。なのでこれからの学校生活でも、このようなことを考えて感じていきたい。その一歩となったもみじ体験はとても貴重な経験になった。

中一

●DVD鑑賞「太一の光／全盲の少年七年間の記録」

○DVDの内容について（目の見えない方は、どのような不自由

をされていますか？ 家族や友達など、周りの人たちはどんな工夫をしていましたか？

・目の見えない方は、周りの様子や人の表情、道の様子などを見ることができないので、移動する

ときや初めて行く場所では不自由を感じることがあると思いました。また、本やプリントを

読むことや、落ちている物や障害物に気づくことも難しいと思

いました。買い物をするときや電車に乗るときなども、周りの

人を助けが必要になることがあると分かりました。しかし、白

杖や点字、音声案内などを利用して、自分でできることを増や

しながら生活していることも知り

ました。
・家族や友達は、困っているときに声をかけたり、移動するときに手伝ったりしていました。ま

た、物の場所を決めて分かりやすくしたり、周りの様子を言葉

で説明したりする工夫をしていました。

学校でも友達と一緒に行動したり、先生が学習をしやすいようにサポートしたりしていました。周りの人たちが特別扱いをするのではなく、自然に助け合いながら生活しているところがとても印象に残りました。

○感想を書きましょう。（目の見えない方と共に生きるために、私たちができることは何でしょう？）

私は、このDVDを見て、目の見えない方がたくさん工夫をしながら生活していることを知りました。また、家族や友達が支え合っている様子がとても印象に残りました。

点字ブロックの上を歩かないなど、小さなことにも気をつけたいです。もし、困っている人がいたら助けたいと思います。

中一

●DVD鑑賞「太一の光」全盲の少年七年間の記録」

○DVDの内容：

目の見えない方は、歩いたり字を読んだり書いたりするだけでも目が見える人とは全然方法や使う道具がちがうので、まわりの理解が重要だと思う。

太一さんご家族は、太一さんが自立して生活できるように他のご兄弟と同じように、食器をかたづけさせたり、家の手伝いをさせていて、手伝いすぎず一人で生活するために必要なことはやらせていた。

○感想：

太一さんが言っていたように、障害のことや、その障がい者の方々のことを正しく理解することが大切だと思った。

その上で必要な手助けをするのが私たちにできることだと思う。私のまわりに、目の見えない

人や視力が弱い人はいないけど、障がいがある方とも対等に接することができるよう心がけたい。

中一

●認知症サポート養成講座

○ディアコニアとは

仕える・奉仕する

①敬神、②奉仕

○講座の内容について（高齢者（認知症）の方はどのようなことに不自由を感じていますか。周りの人たちはどんな工夫をしていましたか。）

周りの人は、個人を尊重する。きつい口調でまくしたてるのはダメ。心が傷ついてしまう。

すばやく判断ができなくなってしまう。↓周囲の手助けが大切さりげなく見守り、ゆっくりと前から声をかける。

ゴミの分別や、今日は何を出す日なのかが変わらなくなってしまう。↓自尊心を傷つけないように

する。やさしく教える。

①まずは見守る、②相手に目線を合わせてやさしい口調で、③余裕をもって対応する、④声をかけるときは一人で、⑤後ろから声をかけない（ころんてしまうから）、⑥おだやかに、はっきりとした話し方で、⑦相手の言葉に耳を傾けてゆっくり対応する。

○感想を書きましょう。（高齢者（認知症）の方と共に生きるために、私たちにはどのようなことができるでしょう。）

もし、自分の親せきが認知症になってしまったら、きつい口調でまくしたてるのではなく、やさしい口調で対応することができたらいいなと思います。

また、前の①～⑦をしっかりと守って対応していきたいです。

また認知症の方でも、共に生きていくことができると思うので、私は認知症の方でも、自尊心を傷つけることや、こまってしまうことをせずに、優しく対応し、どんな方でも安心して過ごすことがで

きるように、がんばっていききたいです。

花の日訪問でも、今回学んだ、認知症の人の自尊心を傷つけず、だれでも安心に過ごせる対応をし、自分が上になるのではなく、下になって、やさしく対応していきたいです。

私も、しっかりとした人になって、手助けができるようになりたいです！こまっている人がいてもにげずに対応していきたいです。

中一

●花の日訪問の記録

○訪問先でどのようなお話しをうかがい、どのようなことをしましたか？

・歌を歌ったり、折り紙を折ったりしてホームの方と交流した。「ふるさと」を一緒に歌ってくださって嬉しかった。

○訪問を通してどんなことを発見

しましたか？

・ふつうのペースで話しても聞こえづらそうだったので、できるだけ大きな声でゆっくりと話した方が相手と上手く会話ができる。

・私たちがお花と歌を届けたことをとても喜んでくださった。

・私にも、先日九九歳の誕生日を迎えた曾祖母がいて、曾祖母もホームで生活しているので、実際に老人ホームを訪れて、私の曾祖母も他の人に支えられて生活していることに改めて気付くことができた。

編集後記

今号もお読みいただきありがとうございます。またご執筆くださった方々にも感謝申し上げます。

「ナルドの壺」とは、イエス様に高価な香油を惜しみなく注いだ女性の信仰に由来しています。勉強、部活、友人関係と、それぞれの賜物を注いでいる中高生の皆さんが、この礼拝通信を通じて、「ナルドの壺」のような瞬間を再確認してくだされば幸いです。皆さんの上に神様の豊かな恵みがありますように。

*十月発行は中学部を中心する内容ですが、次回三月発行予定の八十四号は高等部の礼拝を紹介します。

(編集者)